

クルディスタンの胎動を目の当たりにして

日本クルド学生連盟 早稲田大学 マハール 有仁州

クルド人という民族は一般に日本人には馴染みがない。我々にはそれに触れる機会がないからであろう。だが彼らは独自の言語、文化、宗教的価値観を共有する約 3000 万人により構成される列記とした一民族共同体である。さらに今日に至っては以前よりも多方面で存在感を増しつつある。クルドの存在は日本にとって無関係ではなくなりつつある。

私はこれまでイランやトルコを旅したことがあり、ある程度クルドについて知見があった。だが、今回訪問したイラク・クルド人自治政府は、昨年独立住民投票が行われたこともあり、全クルド地域の中でもより話題性のある地域だ。

仮にも当該地域が『イラク国内』にあるため、どうしても危険な印象を払拭しきれなかった。だが、それは杞憂に過ぎなかった。確かに都市間の幹線道路にはアサイシ(治安部隊)が配備された検問が数多く設置されていた。だが、街中の雰囲気は平和そのもので、人懐っこくホスピタリティ溢れる人々が多い。一瞬にしてこの土地に魅了された。

今回、日本クルド学生連盟として訪れたのは、首都エルビル、第二の都市スレイマニヤ、そしてドホーク。ドホークは人口 30 万人程度の山々に囲まれた小さな街だ。この街は、一時 ISIS に占領された過去を持つ。だが今はその面影は少なくとも市街地の風景には見られない。休日には子供が家族や友人と一緒に遊泳地に出かけ、おじさんが街中でシーシャを囲んで談笑する。そんな何の変哲もない平和な日常がそこにあった。

ドホークで我々一行を世話していただいたのは、クルド日本友好協会の理事テリー氏。は、勤勉で、聡明な方である一方、面倒見がよく、大変お世話になった。

まずドホーク大学に同行させていただいた。同大学の法学部の学生とディスカッションを行った。ここで驚かされるのはクルド人学生と日本人学生の意識の差だ。一般に質疑応答の時間で、日本の大学では積極的に挙手する学生が少ない。もしくは毎回の授業で積極的に挙手する学生は固定化される。だがドホーク大学の学生は、積極的に我々に質問を投げかけてくる。「日本人はクルド人のことをどう思っているのか」「日本の大学生はどんな生活をしているのか」「日本の弁護士はどれくらいの収入を得ているのか」「日本はどのようにして発展し繁栄を謳歌しているのか」など多岐にわたる質問が寄せられた。日本の今の学生は質が低下しており、政治や学問に対する関心が薄いと言われている。だが、クルド人学生はそうではなかった。先進国とか後進国といった表現は個人的に好まないが、彼らは先進国日本から来訪した学生から知恵を得ようと積極的だった。同地域はまさにこれから新しい国家を作ろうというエネルギーに満ち溢れていた。彼ら学生は主体的にその担い手になるとういう意気込みが強かった。この光景は日本の明治維新を想起させる。社会が進化すればするほど人々の思考は退化してしまうのだろうか。日本の学生が彼らから学ばなければならないものは

多いように思われた。

ドホーク大学を訪れた翌日、ドホーク県フェイシュカバーを訪れた時だった。この一帯は、イラク・シリア・トルコ三国の国境地帯となっている。しかし、帰属する国家は、違えど、この一帯は、同じクルドの文化的伝統を共有するクルド人によって構成されている。

トルコ側のクルディスタンは一面が緑に包まれていた。これはトルコ共和国が比較的経済状況が良く、計画的な灌漑によって農業が成功していることに起因していると思われる。

加えて、その一方で、こちらのイラク側には黄土色の大地が広がっている。フセイン時代にはゲリラ活動を抑止する為に伐採され、焼き払われたことも大きな理由でもある。しかし、あちら側に住んでいるのはクルド人、こちら側に住んでいるのもクルド人。同じクルド人でありながらも、偶然にも生まれて来る場所が数キロずれただけで、生活、環境、生涯が大きく変わってしまう事実を目の当たりにした。国境地帯に滞在し、国境線の向こう側にいる人々に思いを馳せる事で、クルド人が国家を持たない最大の民族集団であることをリアルに再認識させてくれる。また、クルド人が生来的に背負わされた不条理な運命、この世界の構造の歪さを伝えてくれる。

次に我が一行はペシュメルガ(クルド自治政府の軍事組織)の駐屯キャンプを訪ねた。そのベースキャンプに駐屯する方々と周辺を案内していただいた。ISの武装勢力と直に戦った経験など非常に貴重なお話を直に聞いた。そこで驚愕したのは将校らの話と、周辺に未だなお、散乱しているISの爪痕だ。ISが武力紛争法も人道的道理も決して通用しない非国家的主体であることを痛感した。さらに日本人のIS戦闘員が存在していたとの証言があった。このことが事実ならそれが報道されていないのが遺憾である。また、周辺にはISの自爆テロ用の戦車が残っており、この地域における戦闘がいかに激しかったかを物語っていた。